

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成果報告書

平成28年7月22日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団  
会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 教育学研究科

職名・学年 博士課程2年

氏名 柘 田 恵

助成の種類	平成28年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研究集会名	国際行動発達学会第24回大会 The 24th Biennial Meeting of the International Society for the Study of Behavioural Development		
発表題目	The development of recognition of partial facial expression in both emotion-elicited situation and display rules situation in young children		
開催場所	Vilnius, Lithuania		
渡航期間	平成28年7月9日 ～ 平成28年7月16日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000円	
	使用した助成金額	350,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空賃・交通費	146,000円
		学会参加費	43,000円
現地滞在経費(宿泊費・日当・現地交通費等)		161,000円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 京都大学教育研究振興財団は、日本学術振興会の特別研究員が応募できる数少ない助成であり、特別研究員に支給される研究費では、今回の旅費を捻出するのは難しかったため、非常に助かりました。今回、発表助成を受けたおかげで、かねてより参加したいと考えていた研究分野における著名な学会に参加することができました。学会において、尊敬する先生や、憧れの研究者と交流できるという大変貴重な経験をすることができ、今後の研究につながる学会参加になりました。採択していただき、本当にありがとうございました。		

私はこの度、京都大学教育振興財団の助成金を受け、リトアニアで開催された 24<sup>th</sup> International Society for the Study of Behavioral Development に参加させていただきました。この学会は2年に一度開催される発達心理学領域において著名な学会であり、今回もヨーロッパをはじめ、アフリカ、アジア、北米、南米、オーストラリアから実に50か国以上からの研究者が参加する多様性に溢れた学会でした。

初日には、いくつかのトピックにおいて若手の研究者向けのワークショップが開催され、私はその中の、“emotion regulation”に関するワークショップに参加しました。このワークショップの講師の一人であった Pamela Cole 先生は、私が関心を持っていた論文の著者ということもあり、学会前から非常に楽しみにしておりました。ワークショップでは、はじめに Cole 先生を含む2名の先生からのレクチャーを受けました。“emotion regulation”とは何かという話から始まり、近年の研究結果や当該領域での問題点まで含んだ内容で一度にこの内容を聞いたのはとても贅沢でした。その後は、約7人ずつのグループに分かれてグループワークを行いました。参加学生の中で日本人は私一人だけで、英語でのディスカッションに不安を感じましたが、英語が第一言語でない学生がほとんどであったこと、かつ皆の研究関心が近いこともあり、ディスカッションにもスムーズに参加することができました。グループワークの中では、私の研究の今後の発展についてみんなでディスカッションすることがあり、新たな観点から今後につながる意見を得ることができました。さらには、Cole 先生が皆の前で私の名前を挙げ、私の研究について言及してくれるという非常に嬉しい場面もありました。そのおかげで声をかけてくれる参加学生が現れるなど、大変貴重な経験をすることができ、とても有意義なワークショップとなり、初日から大満足でした。

二日目から本格的な学会が開始し、私は早速この日にポスターセッションでの発表がありました。今回の私の発表は、“The development of recognition of partial facial expression in both emotion-elicited situation and display rules situation in young children” というタイトルで、保育所に通う年中児（4-5歳児）と年長児（5-6歳児）35名を対象に、様々なストーリーを読み聞かせ、それぞれについて、ストーリーに合う主人公の表情を、目+眉部位、口部位に分けて、3つの画像の中から選択させる課題を実施しました。ストーリーには、主人公が感じる感情をそのまま表出する内容のもの（感情生起場面条件）と、主人公が本当はネガティブな感情だが、ポジティブ感情を表出することが望ましい場面（表示規則場面条件；cf. 相手からもらったプレゼントが嫌いなものだったが、相手に笑顔を表出する場面）を設けていました。その結果、感情生起場面では年中児と年長児の間で成績に差は見られなかったが、表示規則場面では年長

児の方がより正確に表出すべき表情を理解している傾向が見られた、というものでした。

私の発表は夕方セッションでしたが、開始して間もなく一人の女性が私のポスターのところへ来てくれました。研究について説明している時に、その方の名札が見えたのですが、その方は私が自分の研究の参考にもしている論文の著者でした。とても嬉しく、興奮してその旨を伝え、非常に喜んでくださり、名刺を交換することもできました。あまり多くの人が取り組んでできる研究トピックではないために、お互いが感じる研究の難しさについての共有や、その方の出身国であるドイツと日本の子どもの違いについて話すこともでき、夢のようでした。

そのあとも、前日のワークショップで一緒だった学生など多くの方が私のところへ来てくださり、私の研究について、「児童期などもう少し上の年齢の子どもも対象にした方がより発達の軌跡がみれる」、「研究で使用したストーリーによる差を無くすために、ストーリーをもう少し工夫するとさらにクリアな結果が得られるのではないかな」など今後につながる意見をたくさんいただくことができました。当初は私のポスターのところへ人が来てくれるか心配でしたが、予想以上の人に来てもらえることができ、これまでの国際学会での発表で一番良い発表になったと思います。

三日目以降は、様々なシンポジウムに参加しました。その中でも京都大学文学研究科の板倉先生と京都大学出身で現在はカナダのアルバータ大学にいらっしゃる増田先生が海外の研究者の方と一緒にいったシンポジウムでは、日本をはじめとしたアジア圏と欧米圏での心理学的な文化差について非常に面白い話を聞くことができました。また、Cole 先生主催のシンポジウムでは、感情の発達について、**emotion regulation, emotional competence, emotional socialization** など最新の知見を交えた様々な観点から展開される話を聞くことができ、感情の発達についてより理解を深めることができました。このシンポジウムで発表された研究者は、私が論文を読んだことのある方ばかりで、そうした研究者から直接話を聞けるのは非常に感慨深いものでした。

今回、この ISSBD2016 に参加させていただき、尊敬する多くの研究者の話を聞けたことに加え、ワークショップやポスター発表において、会いたいと思っていた研究者の方々と直接お話しするというかけがえのない経験をすることができました。この学会での参加・発表を通して、多くの刺激を受け、研究へのモチベーションが向上したとともに、自分の研究についても少し自信を持つことができました。

最後になりましたが、本会議への参加助成をしていただきました、京都大学教育研究振興財団に心より厚く御礼申し上げます。今回の経験を活かして、今後一層研究に邁進していきたいと思っております。